

盆地の美しい町で、
おいしいワインがつくられている。

ふんおきん

山梨のイメージは、
今よりもっと思えます。



Mariko Hayashi

【プロフィール】

はやし まりこ 1954年、山梨市の本屋を営む家に生まれる。県立日川高校、日本大学芸術学部文芸学科を卒業し、コピーライターとして活躍。1982年にエッセイ集「ルンルンを買っておうちに帰ろう」がベストセラーとなり、一躍脚光を浴びる。その後、小説を発表し、1986年に「最終便に間に合えば」「京都まで」で直木賞を受賞。「白蓮れんれん」で柴田錬三郎賞、「みんなの秘密」で吉川英治文学賞も受賞。2000年から直木賞の選考委員も務めている。主に女性の生き方を書いた小説やエッセイを発表していて、ドラマ化された小説も多数ある。山梨を舞台にした作品も多く、初期の作品「葡萄が目にする」では、ブドウ農家に生まれた主人公の高校生活が描かれ、山梨の風土や生活習慣などもユーモラスに表現されている。

ブドウ畑やモモ畑に囲まれた山梨で育ってよかった

知事 林さんの小説やエッセイには、山梨を舞台にされた作品も多くあり、山梨県民として大変興味深いものがあります。生まれ育った地には特別な想いがあると思われませんが、ご実家の

山梨市には、よく帰られますか。
林 高齢の母が一人暮らしをしているので、月に2回は帰ります。夏には毎年10日間ぐらい帰っていますね。
知事 ご実家は本屋さんだったと同じでしたが、幼い頃から本に囲まれた生活をされていた影響は大きいでしょうね。

林 母が「赤い鳥」(文芸誌)なんかに投稿していた文学少女だったので、その影響が大きいですね。夢多き文学少女という感じでした。それから、山梨のブドウ畑やモモ畑に囲まれた美しい景色の中を通学できたことは、よかったですね。山梨で育って本当によかったと思います。

山梨に「ふるさと納税」ができるとうれしいですね

知事 山梨を離れ東京に出られてから、かなりたつと思いますが、山梨とのつながりは持たれていますか。

林 高校時代の同級生がブドウ園やワインづくりをされていて、毎年、子どもや子どもの同級生を連れて、ブドウ狩りに来ています。山梨を舞台にした「夢見る葡萄」や「葡萄が目にする」など、私の作品がいくつかドラマ化されています。どれも同級生の家など、勝沼がロケ地になっています。皆さんがいろいろと協力してくれて、本当にいいロケができました。

山梨県を代表する文化人である作家・林真理子さんと横内正明知事が対談。
ふるさとへの想いや東京から見た山梨の印象、山梨のイメージアップに向けての取り組みなど、山梨についてじっくりと語っていただきました。

横内 正明

Shoumei Yokouchi

対 談

Mariko Hayashi

林 真理子さん



知事 東京に出られてからも、地元とのつながりを持っていてくださるのは、本当にうれしいことです。ところで林さんからご覧になって、東京の方々の山梨に対するイメージはいかがでしょうか。
林 山梨に赴任したところのある私の友達は、みんないいところだと言います。知り合ったら親戚以上の付き合いをしてくれると言いますね。

知事 最初はなかなか親しみにくいようですが、一度仲間に入ると厚い人間関係ができると言われますね。山梨は東京に隣接し立地条件もいいのですが、残念なことに最近あまり元気がありません。大河ドラマの「風林火山」ブームで観光面はいいのですが、企業誘致や経済などはいまひとつですね。

林 地価も下がっているみたいですね。私は「ふるさと納税」には賛成ですね。毎月東京都に払っている都民税のうち、生まれ育った山梨にちよつとも持つていければうれしいですね。

知事 山梨は別荘も多く、週末を山梨で過ごす方も多いのですが、皆さん住所は東京などにあり、そこに住民税などを払っていますよね。でも別荘のある方にもある程度の負担をしてもらえると、別荘地をかかえる地方としては助かるのですが。

林 別荘の方などが何らかの負担をするのは当然だと思いますね。